

るものとされる。

このような語りが現れた背景には、天理教における原典（みきの著作）への関心の高まり、国内外の社会的緊張や天皇制神話の浸透を受けた新宗教運動自体の政治的次元への接近、思想警察における精神病学的論理の採用などが考えられるが、表層／深層の二元的理解や民衆としての苦難と思想内容の接続という論理構成のあり方に、戦後の民衆宗教研究や新宗教研究との共通点がみられることが注目される。新宗教研究の論理は、調和的な「研究史」の内部でのみ構成されてきたのではなく、新宗教運動とさまざまな社会的諸力の葛藤や対立のなかで生じてきたものとして、複数の経路を辿るものとして認識されなければならないのである。

第十部会

曾我量深の象徴世界観

村山 保史

曾我量深は清沢満之門下の真宗学者であり、清沢の仕事を引き継ぎ、神話的な色彩を帯びた仏教語を独自の解釈によって現に語に置き換える作業をしている。このような仏教語の翻訳作業のひとつとして、曾我は莊嚴という仏教語を象徴という語に置き換え、仏教の世界を象徴世界として解釈している。発表では、彼の象徴世界観を整合的に読み解く。

曾我は象徴の世界を実体の世界と対比している。実体の世界は理性（理知）によって可能となる世界であり、日常の世界である。ここで問われるのは事物の〈固定的・静的な存在様式〉である。一方、象徴の世界は具体的な感覚の働きによって可能となる世界であり、ここで問われるのは事物の〈応変的・動的な生成様式〉である。莊嚴は「飾る」の意味であり、曾我によれば「飾る」は見えないものが見えるように「形取る」ことに由来する。このとき、見えるものは見えないものの象徴となっている。形をもたず見えないものは「純粹感情」とされ、それが「感覚」（内容）となることが見えるように形取ることである。唯識に親しんでいた曾我はこのような感覚の総体を阿頼耶識であるとし、阿頼耶識による象徴の世界が「感応道交」の世

界であると考ええる。そして感覚は「本能」とも表現され、宿業の感覚と結びつけられる。「感に対して仏が応はれる。仏を感じればそこに仏現れる」。

こうした感応道交の関係を空間的に表現したのが穢土と浄土の関係である。感覚作用には不純な場合と純粹な場合がある。純粹であるとは、固定的な実体の世界の見方を離れていることである。不純粹感覚の総体（世界）を空間的に表現したのが穢土であり、純粹感覚の総体を空間的に表現したものが浄土なのである。穢土と浄土の対応関係は時間的にも表現される。一般に考えられる仏教史は、釈迦が仏陀となったことを端緒とする原始仏教から民衆思想としての大乗仏教への展開というものであるが、大乗仏教者としての曾我は、釈迦が仏陀となるための本質的要素が釈迦の成道以前にあり、それが親鸞まで、あるいは現在の仏教者にまで伝えられているというかたちで仏教史を捉える。では釈迦を仏陀とする本質的要素とはなにか。「親鸞に依れば『大無量寿経』の法蔵菩薩の伝説、之が釈尊を生み出した所の純粹の背景でなかつたであらうか」。それは法蔵菩薩の本願である。これを象徴ということでは、人々の感覚が純粹なものとなっていく過程、あるいは、形としては見えない法蔵菩薩の本願（利他的本能とでもいうべき純粹感情）を形にしていく過程が仏教史である。このとき現在、久遠の過去の本願が反映されたものとなる。

このような空間的・時間的構造をもつ象徴世界では、相対者と絶対者の人格的關係はどうなるのか。曾我は唯識の第七識である末那識を不純粹な我執の自己とし、第八識の阿頼耶識を

「固定しない純粹なわれ」「ほんとうのわれ」とする。そして阿頼耶識が法蔵菩薩であるとする。阿頼耶識は一切諸法を生ずる種子を蔵することから「蔵識」とも漢訳されるが、曾我は「法」の意味を「水のごとく流れて、一刻も停止するということはない」ともと解し、瞬間的に生滅する作用の不連続の連続体が阿頼耶識であるとするのである。こうして、感覚が純粹となって自己が「固定しない純粹なわれ」となるとき——この穢土が浄土の象徴となるとき——、自己と法蔵菩薩が対応し、自己が自己であるのみならず法蔵菩薩の象徴となる。われわれは自己の内奥で法蔵菩薩と関係するのである。感覚の純化にもなつて生じる行為が、人間と仏との感応道交としての南無阿彌陀仏にほかならない。

総じて曾我の象徴世界観はわれわれの日常の世界と仏（教）の世界とが結びつく可能性を開くが、その関係様式は感応の「道交」と表現され、相対者の世界と絶対者の世界という、完全には一体化しない別要素の交流であることが示唆されているといえよう。

西田幾多郎における罪・悪の問題

太田 裕 信

西田幾多郎は自身の哲学の根底を「宗教」に置いた。この「宗教」とはどのような意味をもつものなのだろうか。それを考えるとき、重要な点の一つが「罪」あるいは「悪」の問題で